

パネルディスカッション

「図書館の内と外から考える次の一歩」

コーディネーター：松本直樹

パネリスト：小林隆志、竹内庸子、南陀楼綾繁

1 自己紹介、導入

はじめに、登壇者が15分ずつ、自身の仕事や図書館との関わりについて紹介した。松本氏は大学で図書館情報学を教えており、小林氏は鳥取県立図書館で他機関との連携や学校支援等に携わっている。竹内氏はWebサイト「東京図書館制覇！」管理人、南陀楼氏は「一箱古本市」発起人であり、編集者・ライターとしても活動している。松本氏より、本日は3つのテーマに基づいてディスカッションする旨説明があった。

2 テーマ①「図書館の新しい動き(場所としての図書館)」

最近よく聞かれるようになった滞在型、交流型の図書館の在り方について議論した。図書館が利用者にとって居心地の良い場所になるには、施設の新鮮さやカフェの有無が必ずしも重要ではなく、いかに職員・蔵書・利用者がうまく結びついているかが重要であるとの点で、登壇者の意見が一致した。また、公共図書館はあらゆる利用者に関われているため、コミュニティから孤立しがちな人にも居場所を提供できるという可能性がある。この特徴を活かすため、様々な利用者に訴求できる事業や仕組みを考える必要があるが、それらが、蔵書や図書館の特性と関係なく、ただの「客引き」として行われることがあってはならないという意見もあった。

3 テーマ②「本と図書館の新たな関係性」

図書館は今後、マイクロライブラリーや一箱古本市など、本のある場や本に関するイベントにどう関わっていけば良いかを議論した。本のある場やイベントに関わる人々と図書館は「本と人との出会いを仕組む」という目的を共有しているため、様々な連携協力が考えられる。しかし、建設的な連携をするためには、書店や出版社なども含めた「本を扱う場所・人」という大きな括りの中で、図書館の立ち位置を捉えなおす必要がある。そのためには、図書館員が、書店や子ども文庫など「外の世界」にもっと興

味をもち、積極的に境界を乗り越えて交流をもつことが重要である、との指摘があった。

4 テーマ③「課題解決型図書館の新しい動き」

2000年代以降、図書館界の1つの大きなテーマだった課題解決型サービスの事例として、小林氏が鳥取県立図書館の現状と今後の展望を語った。鳥取県立図書館では、ビジネスや健康医療など、特定のテーマに特化した図書館を目指すのではなく、児童・高齢者・障害者等と並んで「大人」に対するサービスを「見える化」した。一般成人に向けてどのようなサービスが提供できるかという視点で、今後も課題解決型サービスを考えていく必要がある。最終的には、様々な利用者に対してフラットなサービスが提供されていることが望ましい、と締めくくった。

5 質疑応答・まとめ

会場の参加者から、いくつか質問が寄せられた。例えば、図書館サービスの評価指標として「貸出冊数」にフォーカスされることが多いが、滞在型の図書館を目指すのであれば、貸出冊数だけでは評価できないと考えられる。貸出冊数以外の指標でサービスを評価してもらうにはどうすればよいか、という質問があった。これに対しては、来館者に対する利用満足度調査を定点観測的に実施してはどうかという提案があった。また、複合施設の中の図書館に求められるものはあるか、という質問に対しては、武蔵野プレイスやゆいの森あらかわ等を例にしながら、サービスの「複合」と「融合」の違いについて語られた。



▲パネルディスカッション